

≡ 文化財だより

第 35 号

令和 5 年 3 月

発行 真鶴町教育委員会

特集 真鶴と源頼朝 その伝承と史跡をたどる

令和四年に放映された大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」では、伊豆の小さな領地を持つ武士であった主人公北条義時が、幕府の政治を取り仕切る「執権」となる過程が描かれていました。

その義時には、背中を追いかけた人物がいました。源頼朝です。頼朝は平家打倒のため、伊豆で挙兵した後、鎌倉へ拠点を構えました。そして、平家を倒し、東国を拠点とする、武家政権樹立を成し遂げました。

その頼朝は、まず義時とともに伊豆で挙兵し、その後東国へ向かい、相模国石橋山（現在の小田原市）で平家側の大軍と戦い、大敗を喫します。頼朝は、平家の追討から逃れるために、箱根、湯河原、真鶴を転々とし、「鴎窟」に身を潜めた後、真鶴から船出をして房総の地へ向かったといわれています。

現在に至るまで、真鶴には頼朝に関連する多くの伝承や、ゆかりの場所が残っており、戦国時代の大名や連歌師、江戸時代の藩主などがこの地を探訪したといわれています。

では、真鶴において頼朝に関連する伝承はどのようなものであり、ゆかりの地はどういったものでしょうか。

今回の文化財だよりでは、「真鶴と源頼朝」と題して、真鶴にある頼朝ゆかりの地や伝承について、貴船神社に残る資料や、中学校の郷土学習の取り組みからみていきます。

また「先人からのメッセージ」の第2回目は、江戸時代から現代に至る真鶴港や石の道、石の切り出しの姿を、写真や古地図、石切図屏風などを参考にみていきます。



岩海岸（伝 頼朝船出の浜）

目次

特集 真鶴と源頼朝
その伝承と史跡をたどる

文化財、先人からの
メッセージ②

文化財審議会委員 三木 宏
..... 2

真鶴町と源頼朝について
中学校での過去の
取り組みから

文化財審議会委員 小関 雅則
..... 3

源頼朝と貴船神社

文化財審議会委員
國學院大學講師（美学・芸術学／博士：歴史学） 平井 倫行
..... 5

文化財審議委員会
研修視察報告

文化財審議会委員 川口 仁齊
..... 8

令和四年度文化財保護事業
..... 8

文化財、先人からのメッセージ②

文化財審議委員 三木 宏

令和四年度は世界中に感染症の不安が蔓延する中、軍事的紛争の悲劇が繰り返され、経済的な動揺が人々の生活を脅かしています。私たちは今、見通しの立たない歴史的な混乱の時代に際会しているのかもしれませんが、このような不透明な時こそ、確かな軸になるものが求められるのではないのでしょうか。

そんな中、国指定重要無形民俗文化財の「貴船神社の船祭り」がコロナ感染予防の観点で大幅に縮小されながら執り行われたことは、文化財としての祭りが継続していくためにも必要不可欠なことであったといえます。

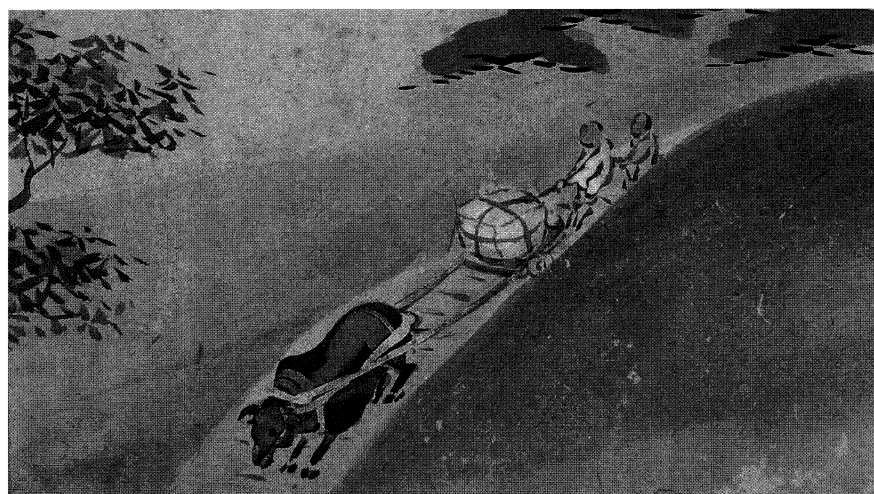
小早船の水受けこそありませんでしたが、令和元年から三力年にわたり国庫補助事業として昨年度改修が終了した東西の小早船は、やはり「貴船神社の船祭り」のシンボルとも言えます。祭りのように飾り立てられた小早船の前で記念撮影をする親子連れを見るに、港に浮かんだ姿を子供達に見せてあげたいと貴船神社の船祭りの完全復活を願ってやみませんでした。

西の浜から東の小早船をのぞむにあたり、時代とともに海岸部分は築港

工事などで埋め立てられ、私の子供の頃を思い返しても変化の激しい真鶴港であります。昔の真鶴港はどんな様子だったのでしょうか。貴船神社の船祭りののはじまった江戸時代の真鶴港を思い描くには、大正時代の古い真鶴港の写真が参考になると思います。

しかし変化が激しい海岸部分に比べて、磯崎地区の背後の山の稜線は昔から変わらない姿を残していると感じました。

私が立っている場所からは、前号「文



石切図屏風（運搬部分拡大図）



真鶴村絵図（部分拡大図）

化財 先人からのメッセージ①」で紹介した真鶴町重要文化財の「真鶴村絵図」（昭和四五年一月指定）から位置関係を割り出すと、絵図に描かれている日和山が港の対岸に見える位置関係になっています。

「真鶴村書上帳」（寛文一二年一六七二）によると「日和山の岸辺には涼島があり、山の港側の磯辺を波止場と言う」とあります。江戸時代、石材運搬で賑わった真鶴港の船主や船頭がこの山に登り、出港にあたり風の具合を見たということです。山頂から波止場の弁才船までお互いの姿を目視しながら直接、水手（かこ・水夫）に

指示ができる位置関係です。まさに理に適っているといえます。風によっても船頭の潮がれた声、ここまでの聞こえてきそうな気がします。当時の主要な産品である積荷の石材は、どのように切り出され、そして、どのルートで、どのように運搬されていたのでしょうか。「真鶴村書上帳」には、大石は牛車で、小石は人足が修羅で運び出したとあります。また、「真鶴村絵図」から考察すると丸山丁場から大ヶ窪、横吹、上山、磯崎への石材の搬出ルートが読み取れます。問題は、大ヶ窪から横吹に至る急坂ですが、ウインチがなかった時代、船を陸揚げするのに使わ

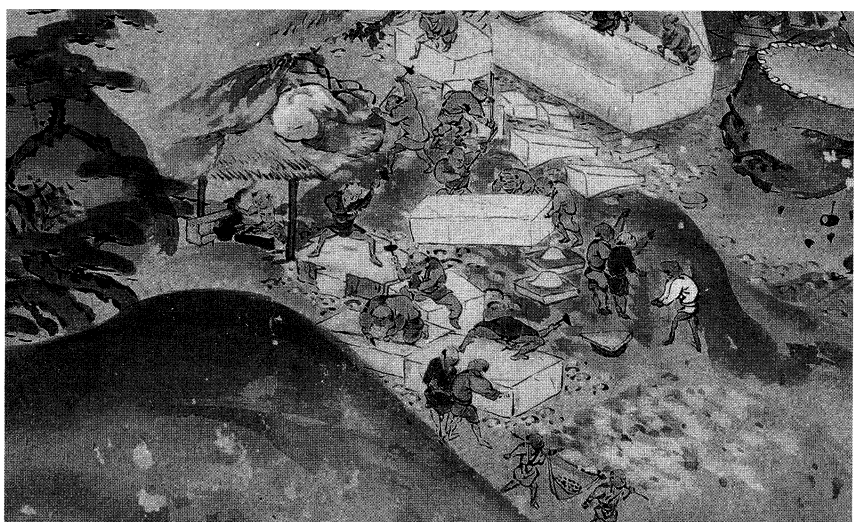
れていた轆轤^{ろくろ}が当然活用されたと考えられます。

この轆轤で修羅を巻き上げれば急坂での運搬も可能と考えます。そして上山を抜け、日和山から磯崎の波止場に石材を落とせばいいのです。大正時代の真鶴港の写真をみると、磯崎地区の背後に山肌が露出しているのが読み取れます。まさに「真鶴村書上帳」の記述に合致します。

当時の産業道路といえる「石の道」を探るための現地調査をしましたが、



大正時代の真鶴港（日和山を望む）



石切図屏風（切り出し部分拡大図）

す。このようにして、丸山から磯崎へ至るルートを辿ることができました。古い写真で当時の横吹付近の様子を想像してみてください。

また、当時の石材の切り出しの様子は「石切図屏風」（小田原市郷土文化館所蔵）が参考になります。石を割るための矢穴（やあな）の加工など、現代は機械化されていますが作業工程は昔と大差がないように思われます。

江戸時代には石材の用途として江戸城築城やお台場建設など大規模土木工事に使われてきました。

令和四年は、真鶴駅開業百周年ですが、この鉄道工事のインフラにも、戦前は軍部へ用材供給に石材業はおおに関わってきました。石材業、それを運ぶ廻船業は時代とともに変革してきたものの、その時々への要請に応じてきました。その軸は変わらない、万古不易の伝統ある産業として位置付けられる石材業をこれから町の誇りとして我々は語っていきたいと思います。

真鶴町と源頼朝について 中学校での過去の取り組みから

文化財審議委員 小関雅則

真鶴中学校に勤務していた時、「総合的な学習」と「社会科の郷土学習」で真鶴町の地理的・歴史的な学習の分野で、郷土学習のまとめとして体験学習に「真鶴の漁業・定置網漁とアジの開き作り」「三ツ石海岸での県天然記念物のウメボシイソギンチャクの調査」や真鶴町観光協会のウォーキングモデルコースを参考に「道祖神コース」「歴史・ロマンコース」「背戸道・美の町コース」の実地体験を実施した。

小学校でも郷土学習や郷土研究クラブなどの活動で、真鶴のことを勉強していると思う。中学校では、更にその「郷土・真鶴」を他者にどのように伝えるのか、その知識を個人で身につけるための取り組みをしていた。生徒が高校等に進み、「真鶴出身です。真鶴には・・・。」と説明が出来ることを学習の目標の一つとした。

その中で、源頼朝に関連する「鵜窟」「源頼朝の腰掛石」「謡坂」「源頼朝船出の浜」の四つについては、真鶴町の資料・史料等はもちろんのこと、町外の熱海市、三島市伊豆の国市などの資

料・史料等も紹介した。

当時の文化財審議委員の方々に調査当日の町内散策と一緒に同行して頂き、また実施二週間程前に中学校に來校頂き各箇所のお話を聞き生徒用のしおり等を作成した記憶がある。

二〇二二年一月からNHK大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」の放送開始もあり、源頼朝や北条政子、そして三浦半島・鎌倉から相模西湘地域、伊豆半島にかけての地域も雑誌やマスコミに取り上げられるブームになっている。

真鶴中学校勤務中の郷土学習で「真鶴」にまとめた当時の文化財審議委員の先生からのお話の内容や、当時生徒に配布した「真鶴散策のしおり」の一部を掲載し過去の取り組みの紹介とする。

《生徒に配布したしおりから》

一一八〇年（治承四年）八月二四日午前四時頃、石橋山の戦い（小田原市・早川駅と根府川駅のほぼ中間地点）で、約三〇〇騎で平家方の大庭景親率いる三〇〇余騎と相対し多勢に無勢、頼みにしていた三浦一族が大雨のために酒匂川で足止めされていたこともあり頼朝軍は敗北に移り、夕方敗北した源頼朝は、山中に逃れ一時箱根権現（現・箱根神社）に潜んでいたが、土肥実平の案内で土肥郷（現・湯河原町）へ下り、

八月二八日、真鶴の浜から安房国（現・千葉県南部）へと向かったとされる四日間が箱根町・真鶴町・湯河原町での出来事である。

湯河原町の城願寺に残されている頼朝主従七騎の伝説によれば、従っていたのは、安達盛長・岡崎義実・新開忠氏・土屋宗遠（土肥実平の実弟）・土肥実平・田代信綱と言われている。

頼朝の脱出に協力した漁船は、その後長く税が免除されたとも伝えられている。

また、観音様が船頭となって助けてくれたという伝説も残されている。



石橋山合戦の碑

その頃、北条政子と娘大姫は、走湯権現（現・伊豆山神社）に身を潜めていたが、九月二日、平家の手から逃れるため、別当（当時の長官）の文陽房覚淵のはからいによって、秋戸郷（現・熱海市伊豆山ホテル水葉亭付近）に移された。



政子・頼朝ゆかりの碑

藤国平らと真鶴を船出したことになっている。

また、安房国に上陸したときは「土肥実平を連れて」と記録されているのみで他の名がないので、もしかすると頼朝の船に乗っていたのは実平のみだったのかもしれない。

ただ、『延慶本平家物語』『平安末期・鎌倉初期の内乱を描いた軍記物語。十三世紀前半には原型が成立したとされる。作者を信濃前司行長とする説があるが、未詳（まだ詳しく知られていないこと）』は、土肥実平も岡崎義実も頼朝とともに乗船し、安房国へ渡ったと伝えている。

このときに世話になった真鶴の三人に「五味」・「青木」・「御守」という苗字を与えた。

「五味」は食事を提供した者、「青木」は頼朝が隠れ潜んだ岩屋（鷗窟）を木で覆い隠した者、「御守」は見張り役をした者で、真鶴三苗字と呼ばれている。

「鷗窟」は、源頼朝が石橋山の合戦に敗れ、山中へ逃げた後、身を隠した場所であり、当時は海に面しており、船でなければ辿り着けず、奥行きは一三〇mと特殊な地形であった。

『吾妻鏡』【治承四年（一一八〇）の以仁王の乱から、文永三年（一二六六）宗尊親王京都返還までの鎌倉幕府の歴史を記した編纂物。一三世紀末に北条氏と関係深い幕府関係者が編纂したとされる】の記録では、岡崎義実は頼朝の船出の前日に、北条政子・義時・近

湯河原町北西に連なる城山にも土肥
相山巖窟がある。

敗走の途中に二か所あることから、
昭和時代初期には双方が真贋を争うこ
ともあったとされているが、現在は「頼
朝は房総半島へ渡るまでに、いくつか
の場所に身を隠したのではないか」と
いうことになっている。

貴船神社にある「源頼朝の腰掛石」
は源頼朝一行が休息した岩石を「鵜窟」
付近から移設したものと伝えられてお
り、現場では水平だったものを垂直に
立て、「腰掛石」として設置している。

「謡坂」は、真鶴駅から岩海岸へ行
く途中にある坂で、敵により自分の館
を焼かれた土肥実平が、土肥に三つの
光があるのを見て、皆の気持ちを引き
立てようとして、第一の光は八幡大菩
薩が頼朝を守ってくれる光、次の光は
頼朝が繫昌して一天四海を輝かすとい
う光、第三の光は実平が頼朝の御恩（ご
おん）を受けて放光する光と歌い、舞っ
たと伝わっている。

岩海岸は「源頼朝船出の浜」である。
一一八〇年（治承四年）八月二八日、
源頼朝は従者とともに七人で安房国へ
と船出をした。

源頼朝らが船を漕ぎだしたところを
追手に見つかってしまい、追手が村民
に「槍や何かを持っているあの船はな
んだ」と訊ねたところ、村民は「近く

で鮫が出て困っているの、退治する
ための鮫追船です」と嘘をついたと言
われている。

源頼朝は無事安房国へ逃れることが
でき、岩海岸の鮫追船二艘は長年船役
が免除されたと言われている。

その後、源頼朝は鎌倉幕府を開き、
一一九二年「イイクニ開こう鎌倉幕府」
と記憶した人も多いであろう。現在の
教科書は、一一八五年「イイハコ作ろ
う鎌倉幕府」である。

私は定年退職後、教科書会社の特別
編集委員として、この「一一八五年」
への変更や歴史的分野の教科書の記載
事項（踏絵→絵踏、黄河文明→中国文
明、江戸時代の天領→幕領等）の変更・
確認などに従事した。

鎌倉幕府成立年の変更理由は、平
氏滅亡後、源頼朝の権力拡大を恐れた
後白河法皇が源義経に源頼朝追討を命
ずると、頼朝は京都に軍勢を送り、法
皇に諸国に守護を、荘園や公領に地頭
を任命する権利を、更に諸国に国衙
（こくが）（国府の役所）の実権を握る
人事権を認めさせた。このことから
一一八五年を鎌倉幕府成立とした。

（文中の写真は、二〇二二年一〇月
に筆者が撮影したものである）

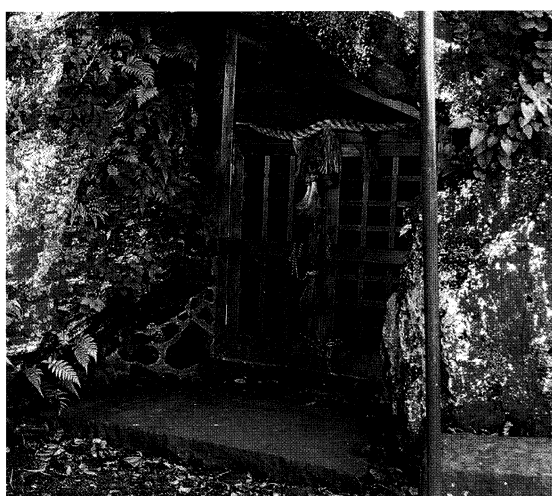
源頼朝と貴船神社

國學院大學講師

（美学・芸術学／博士・歴史学）

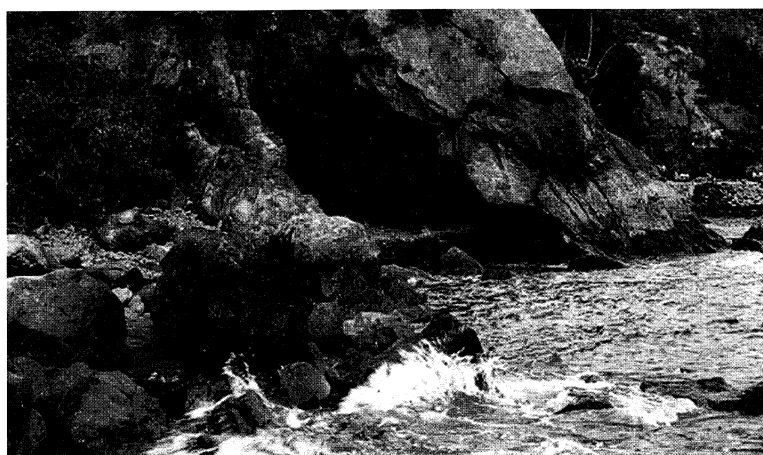
文化財審議委員 平井倫行

治承四年（一一八〇年）八月、石橋
山合戦に敗れた源頼朝が真鶴の岩海岸
より安房へと船出し、遂に鎌倉幕府を
開いたという故事は有名ですが、その
際に潜伏したとされる場所が真鶴港の
西岸、貴船神社からもほど近い鵜窟
です。



現在の鵜窟の様子

この巖窟はかつて海に面しており、
船でなければ辿り着く事の出来ない特
殊な地形にありました。



鵜窟（大正末期～昭和初期）

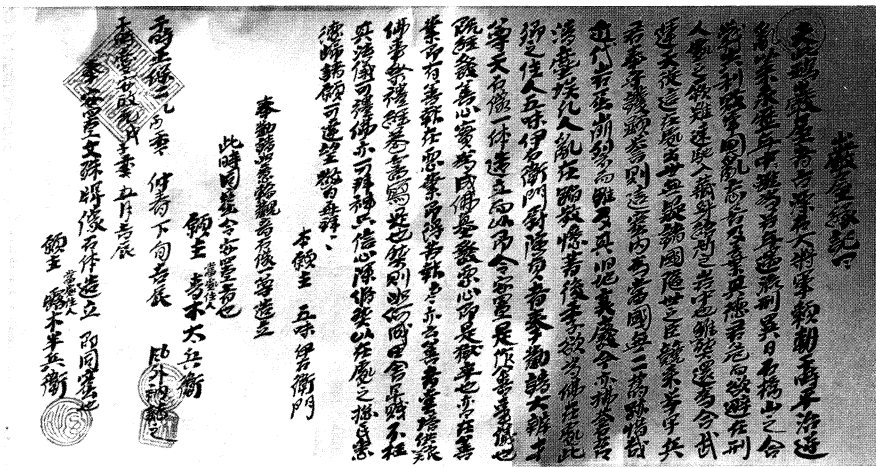
搜索に來た大庭景親の兵達がこのこ
足を踏み入れようとすると、内部から
鵜という鳥（架空の霊鳥）が群れをな
し飛び立った為「人がいる筈がない」
と立ち去り難を逃れた事から、この名
称が付けられたとされます。

この間、頼朝に食料を提供した村民
は五味の姓を、周辺の警固にあたった
者は御守の姓を、樹木をもって洞穴を
覆い隠した者は青木の姓をそれぞれ賜
わり、以来「真鶴の三名家」と言い伝
えられてきました。正保二年（一六四五
年）、名主・五味演貞は僧・蔭山に依
頼して『鵜窟縁起』を作り、その紀文

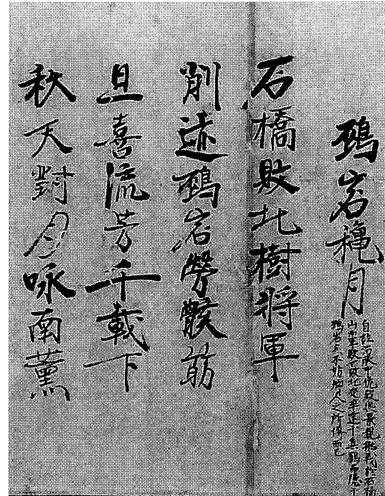


鵜窟縁起碑文(町民センター入口)

巖屋縁起日



と頼朝の絵像を巖窟中の岩石に刻んで後世に伝え(原物は現在、町民センター前に展示)、この辺りの由来については各地を放浪し数々の伝説や作品を残した奇僧・風外も、真鶴に在住した晩年『巖屋縁起日』(一六四五年)として記しています。



真鶴八詠(部分)

下記のごとき内容を持つ詩歌です。
「石橋に敗北れ將軍を樹つ／迹を鵜の岩に削り骸筋を穿う／且く喜び芳を千載の下に流す／秋天月に對して南薫を咏ず」

ところで現在、鵜窟として人口に膾炙しているのは、湯河原町にある土肥相山巖窟ですが、これは昭和三〇年(一九五五年)十一月一日に、同地が県からの史跡認定を受けた事が背景となっています。

在していた郷土史研究会・郷土を知る会発行の機関誌『真鶴』に掲載の平井大海(筆者の曾祖父にあたり、第二九代貴船神社宮司)の論考「鵜窟夜話」においても(県の調査については基本的に尊重すべきであるが、と姿勢を正しつつ)その指定に関しては『吾妻鏡』や『源平盛衰記』を除き、何ら根拠たり得る史料や、伝承されている主だった口碑等も存在していない事に、疑問が提示されています。

実際、鎌倉幕府が編纂した「正史」としての『吾妻鏡』はともあれ、編者・成立年共に未詳の軍記である『源平盛衰記』は史学的な根拠としては十分でなく、大海の指摘は一定の正当性を有していると思われます(『吾妻鏡』には「武衛(頼朝)御誓の中の正観音の像を取りて、ある巖窟に安んじ奉る」とは記載されていますが「土肥の鵜窟」というような「具体的な場所の指定」はなされていません)。

もっとも筆者は別段、土肥と真鶴一方どちらかが真実であり、どちらかが偽りであるという議論をしたい訳ではありません。個人的な見解を述べるのなら、どちらも、またあるいは他にも複数の潜伏箇所を移動しつつ、頼朝従士は真鶴より船出をしたと考えるのが妥当であって、あるいは別に同様の地形が存在したとして、むしろ至極自然というべきでしょう。

こうした伝承を持つ鵜窟の存在は『吾妻鏡』(編纂は鎌倉時代末期と推定)や軍記『源平盛衰記』(年不詳、鎌倉時代中期以降の成立か)などにより広く喧伝され、戦国大名・北条氏綱は永正一六年(一五一九年)に(『小田原記』)、連歌師・宗牧は天文一四年(一五四五年)に当地を訪れて船遊びを楽しんでおり(『東国紀行』)、また、寛永二〇年(一六四三年)には、真鶴に採石場を設定していた水戸藩主・徳川頼房も来遊をしています(『源頼房公来駕記』)。風外が真鶴各所の美しい情景を謳った『真鶴八詠』(貴船神社蔵、一七二四年)に含まれる「鵜窟秋月」は、

とはいえ、当地の鵜窟に関してみれば、他地域のそれとは明確に異なる歴史的な「文脈」を形成してきた事も、また事実です。

例えば、先述した往時の名主・五味家が徳川頼房を迎えたその僅か二年後に『鵜窟縁起』『巖屋縁起日』という二つの史料を早急に整備させている事の意味は、それなりに重視すべきものと考えられます。

この文書は同家の依頼を受け、その時真鶴に在住した僧・蔭山および風外により制作がなされており、そこには將軍家を饗応した名譽を寿ぐと同時に、「頼朝より姓を下賜された五味家と源氏（徳川家）との繋がり」の根拠となる村内の史跡鵜窟を顕彰し、それを受けた（あるいはそこに「接続」する）家名の歴史・権威化を、学識ある文化人（宗教家）の声名を借りて補強しよう、という意図も、少なからず働いていたと思われ（『源頼房公来駕記』もまた風外の筆による）。そしてこの政治的な振る舞いには、これら「真鶴の鵜窟」に関する伝承が当時、相応の社会的な一般性や認識の元に広範に共有されていなければ、決して成り立たぬものである事は明らかです。

この二つの文書のうち『巖屋縁起日』は現在も貴船神社に所蔵され、特に風外の手になる文書としては他に『貴宮大明神寄進奉加状』（一六五〇年）お

よび『貴宮大明神縁起』（一六五〇年）等が同様に保管されており、これらはみな頼朝や神社創建に関わる記録という意味で重要な資料的価値を有しています。わけても『貴宮大明神縁起』は、風外の生年を特定可能とする現存唯一の資料である点からも、実に意義深い文書といえるでしょう。

五味家の篤い庇護の下、当地の歴史にまつわる多くの文書の作製に携わった風外の書記の背景には、すべからく同家からの一定の意向が働いていたと推察され、前掲した貴船神社の史料もまた、かくした文化交流の圏域に成立したものであった事が考えられます。しかしながら、五味家が所蔵した『鵜窟縁起』をはじめとする文書や宝物は今日、同家の町外転出に伴う所在不明の現状にあり、町指定の重要文化財となっている貴重な史料である点から、ここに強く、状況の確認と、その管理に向けた建設的な議論が志向される事が望まれます。

頼朝一行が真鶴から出帆してより以降、当地には他に何か、その「後」を繋ぐ物語が伝えられてはいないのでしょうか。

あくまでも口碑伝承ではありませんが、貴船神社にはこの時、心無い大庭の兵達によって御神体の一つである香木（伽羅）の船が現在の社殿の背後（通称「駒ころばし」）で焼かれ、その紫

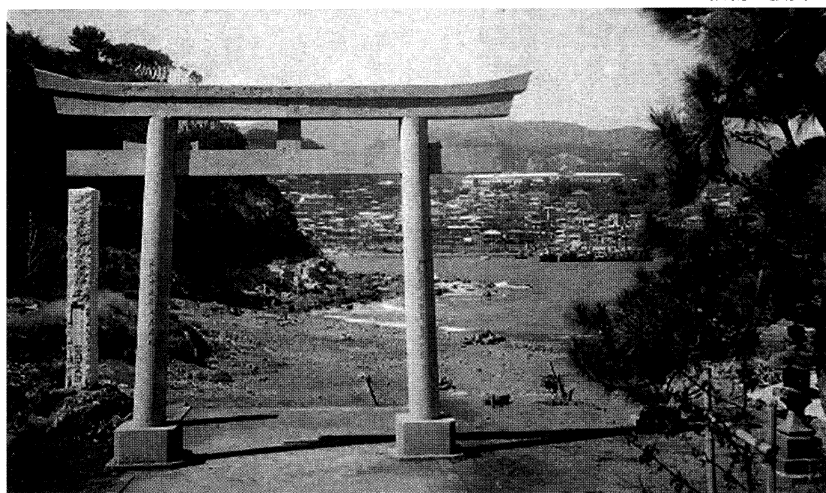


頼朝の腰掛石

雲と薫香が七日七夜、真鶴の地にたたびいた、という言い伝えが残されています。

さながら幻想文学のごとき雅趣を感じさせるこの伝説にはしかし、どのような背景が存在したのでしょうか。真偽のほどは別箇の論点として、ともあれこの「伝承（物語）」が拠って立つ主たる内容が「神社に対する平家方の蛮行」に重きが置かれている点は着目されます。仮にこの「伝承」が、何がしか「神社が平家より受けた被害を後世に伝えよう」という意志を反映したものであるとしたならば、そこには貴船神社ないしはその氏子・信仰圏が頼朝の亡命に際し与えた援助への「報復（処罰）」あるいは、当時の真鶴全体が平家との間に持った「不和」の感情をこそ、その物語的起源として汲んでいる、と推察する事も可能です。

現在、貴船神社の境内に建立されている「頼朝の腰掛石」は、頼朝と



旧貴船神社境内からみた往時の真鶴港の風景

その家臣が休息した岩石を昭和九年（一九三四年）、港の改修工事に伴い鵜窟付近より移設したと伝えられます。

頼朝にとって真鶴の地は敗残の苦境を噛み締めた土地でありましたが、また同時に一族の復興と国家安泰への決意を新たにした土地でもあり、文字通り「再起・再生の地」でした。「謡坂」や「船出の浜」等、町内には他にも頼朝由来の名所が存在します。

郷土の歴史を感じさせる出来事として、これからも語り継ぎたい伝承です。

文化財審議委員会研修視察報告

第一回

視察日 令和四年七月一二日（火）

視察地 伊豆方面

源頼朝と北条氏に関する史跡見学

第二回

視察日 令和四年十一月一五日（火）

視察地 鎌倉方面

鎌倉幕府の中心地と執権政治に至る

関連史跡の見学

令和四年のNHKによる大河ドラマは、「鎌倉殿の十三人」と題されて、源頼朝は伊豆へ流されてから成人し、治承四年に挙兵してやがて鎌倉幕府を成立させました。その後、頼朝の死後、北条氏による執権政治が行なわれるまで、その間に活躍した鎌倉幕府をめぐる十三人の人物による数多くの逸話やエピソードを盛り込んだ大作のドラマでありました。

脚本の三谷幸喜氏によると、「吾妻鏡」を原作として、そこに記されていない部分を想像と創作で補い、唯一無二のエンターテインメント大作に仕上げているということでした。

真鶴町内にも「鵜窟」をはじめとして、頼朝に関する史跡や伝承が数多くあります。そこで他の地域では、北条氏や鎌倉幕府に関連する史跡がどのように保存され、公開されているかを

知ることを目的として、大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」に因む史跡を見学することになりました。

第一回目の研修視察は伊豆方面、第二回目は鎌倉方面に訪れて視察を行いました。

第一回の視察で訪問した伊豆の国市では九力所の北条氏関連の史跡を中心に視察見学しました。そこでは、大河ドラマの放映に合わせて、最近設置されたような史跡の案内標識や史跡整備の様子が多くみられ、観光客の誘致に積極的な様子が散見されました。

第二回目の研修視察の鎌倉では、頼朝の墓所をはじめ、八力所の史跡を見学しました。東京に近いということ、昔から多くの観光客や史跡を訪ねる人があったので、設置された説明板や説明標識は、一部は幾分古いかなと見受けられるものもあるようにうかがえました。

観光客がよく行く史跡は、よく整備されておりましたが「鎌倉殿の十三人」のドラマでとりあげられた史跡であっても、多くの観光客の訪問が無いような史跡は、今一步の整備が必要と感じられるものもありました。

史跡の随所に大正年間に当時の鎌倉町の青年団によって設置された、説明文が刻まれた石碑がありました。それらは、立派な石に彫られたものであり、文は大正時代らしく文語体で今の若い人たちにとっては馴染み

にくいと考えられました。しかしながらそれらは、かつて鎌倉の人々がいかにか文化財を大事にし、多くの人に知ってもらい、文化財活用に使われてようとしたかという意欲がうかがえました。さらにその石碑は作成されてから約一世紀を経ており、その石碑自体が文化財となるのではないかと考えられました。

文化財とは、文化的遺産のことであり、一度失うと再現不可能なものです。真鶴町にも多くの文化財があります。その保護と活用に一層努力し、後世に引き継いでいかなければならないと感じました。

文化財審議委員 川口仁齊



研修視察（鎌倉市内）

令和四年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業

・文化財だより第三五号発行

・町民センター展示事業

古地図・絵地図展（4/6～5/29）

幼稚園・学校の歴史展

頼朝展（6/1～6/26）

後北条と古文書展（10/25～11/27）

真鶴駅開業100年展（11/29～12/27）

真鶴の海女展（R5/1/6～3/26）

民俗資料館展示事業

端午の節句展（4/11～5/29）

貴船まつり展（6/4～8/21）

土屋家と石材業展（8/27～11/27）

お正月展（12/3～R5/1/29）

桃の節句展（2/4～3/26）

◎文化財保存事業

国指定重要無形民俗文化財

・貴船神社の船祭り

町重要伝統文化行事

・岩兒子まつり

・岩地区どんと焼き